

怒り場面における社会的共有のプロセスとその効果の検討

特別支援教育・臨床心理学コース 臨床心理学専修
岡崎 りさ

【はじめに】

日常生活において、怒りは身近な感情の一つである。怒りの表出や過度に抑制することは心身・対人関係に悪影響を与える。また、湯川・日比野(2003)は、怒り経験時の行動を、8パターンに分類したが、その中でも社会的共有に注目する。社会的共有とは、Rimé, Mesquita, Philippot, and Boca(1992)によると、「情動体験をした者が聞き手に対して行う情動体験の説明」と定義される。前述したような問題点があるために、怒りを第三者に伝える社会的共有は直接攻撃行動にでるわけではなく、感情を発散するため、怒りに対する一つの方略であると考えられる。以上のことから、本研究では、社会的共有に焦点を当てる。社会的共有に重要なことは、聞き手の反応である。川瀬(1999)は、ネガティブな情動経験によって個人的な信念の崩壊に直面した人々は、重要な他者から受容される経験を通して、信念の再構築を図るということを考察している。しかし、川瀬(1999)の研究は、ネガティブな情動全般に対してであり、怒りの感情について焦点を当てていない。Wetzer, Zeelenberg, and Pieters(2007)が、怒りの社会的共有においては、話し手が聞き手からの正当性を求めていることを指摘しているように、怒り感情の社会的共有においては、他の情動とは異なる過程を経るのではないかと考えられる。さらに、怒りの社会的共有によって、受容感を得てから信念の再構築を図るまでの過程については研究されていない。

その過程として以下のことが考えられる。一つ目に緊張が緩和されるということである。Pennebaker(1989)は、ストレスを言語に置き換えることは十分に処理することを可能にするため、ポジティブな効果をもたらすということを指摘している。次に、聞き手から受容感を得ることで、怒りを感じた本人が自らの怒りの正当性を肯定することができるという点が挙げられる。Averill(1993)は、怒りには社会的に共

有されたルールがあり、このルールに基づいて個々の怒りの正当性が評価されるとしている。社会的共有により受容感を得た後に、以上の過程を経ることで、怒り経験について信念の再構築がなされることが考えられる。

【目的】

本研究では、緊張緩和および正当化の観点を取り入れ、社会的共有によって、怒りが受容され、信念の再構築に至るまでのプロセスを明らかにすることを目的とする。

【方法】

大学生及び大学院生 20 名を対象とし、半構造化面接を行う。得られた回答を M-GTA で処理する。

【今後の展望】

怒り経験における社会的共有の仮説モデルを検証するため、予備調査を行い、確認されたプロセスについて、自己価値観や自己受容感との関連、社会的共有を行った後の相手との親密度などの関連を明らかにする予定である。

【実施報告】

受容について、聞き手の反応が受容的であれば、受容的なのか、それとも受け手が受容感を感じた場合、受容的と捉えるのかが曖昧であるというご指摘をいただいた。どのような態度が受容的であるとするのかをもう一度検討しなおす必要を感じた。また、怒りの正当性を必ずしも求めない社会的共有の場合、そのモデルは適用されるのかというご指摘をいただいた。今後、面接を行う上で、何のために社会的共有を行うのかという理由を聞き、検討したい。